



# 浦添の歴史散歩



- 仲西の獅子舞
- 仲西貝塚
- 勢理客橋碑
- 勢理客の獅子舞
- 小湾アギキテマリ
- 内間の獅子舞
- 内間大アカギ

浦添市教育委員会





## 古都「浦添」へのいざない

去る沖縄戦で、灰燼に帰した首里城が平成四年十一月に復元され、往時の姿を見ることができるようになりました。首里城は、琉球舞踊や組踊、古典音楽、紅型、泡盛、琉球漆器などとともに、沖縄が世界に誇れる、我々の先人たちがつくりあげた貴重な文化遺産であります。

ところで、首里城正殿は、「百浦添ももろおそい」と呼ばれていました。百の（たくさん）浦々を襲う（支配する）琉球王国の中心という意味です。「うらおそい」は浦添の古名でもあり、このことから、浦添が首里以前の王都であり、その王宮が浦添城グスクだと考えられます。

さあ、皆さん、このガイドブックを手に、首里以前の王都・浦添の歴史と民俗・文化財の散歩に出発しましょう。



浦添市展望（安波茶から牧港方面を望む）

# てだこの都市・浦添

まち

## 浦添の地理と歴史

浦添市は、沖縄本島中部に位置し、西は東中国海（東シナ海）に面し、南は那覇市、北は宜野湾市、東は西原町に接する面積十九・〇六平方キロメートルの都市です。人口は、約十五万人で県下三番目です。

市の東部は丘陵地で山林や文化財が多く、西部は平坦で市街地が広がっています。河川は、すべて西に流れて東中国海に注ぎ込んでいます。

一二世紀末以降、舜天王統、英祖王統、察度王統が浦添を王都に琉球あるいは中山一帯を二二〇年間、支配していたと伝えられています。その後、王都は首里に移って、浦添は地方の一閭切となり、近世に閭切の再編が行われて、今の市域の原形ができました。

一八七九年（明治十二）の琉球処分で沖縄県が誕生した後、一八九七年（明治三十）には、閭切番所が閭切役場に改められ、また、一九〇八年（明治四十）には、近代的な村制になりました。戦前までは、典型的な純農村で、人口も一万人前後でした。

## 農村から都市へ

去る沖繩戦（一九四五年）で浦添は激戦地となり、四千百余名の村民の尊い命が失われました。しかし戦後、次第にまちとしての形も整い、県都那覇市と隣接していたこともあって都市化が進み、一九七〇年（昭和四十五）七月一日に市に昇格しました。「てだこの都市・浦添」を将来像として「太陽とみどりにあふれた国際性ゆたかな文化都市」の実現に向けたまちづくりを行っています。

\* 「てだこ」は、英祖王の神号「英祖日子」<sup>えいそにち</sup>に由来しています。

# 貝塚時代の遺跡

沖縄では、一万〜三万年前の人骨が発見されていますが、その後、空白の期間があり、そして土器や磨いた石器を使う時代が始まります。最も古い土器は約六六〇〇年前の、爪と指で文様をつけた爪形文土器です。

浦添では城間古墓群とチヂフチャー洞穴遺跡から、その爪形文土器が出土しています。

沖縄の貝塚文化は縄文系の文化ですが、しだいに独自性を強めてきました。そして、本土が弥生時代、古墳時代に入っても独自の狩猟採集の文化が平安時代の頃まで続きました。

浦添市内にも各地に貝塚時代の遺跡が残されています。一口に貝塚時代といっても、生活の仕方に変化がみられますが、ここでは、代表的な貝塚時代の遺跡を紹介しましょう。

## 浦添貝塚

バイパス（国道三三〇）の伊祖トンネルの上にある石灰岩丘陵の北側崖下に、貝塚があります。この場所はもともと浅い岩陰だったようで、一九六九〜七〇年（昭和四四〜四五）に発掘調査が行われ、約四〇〇〇年前の土器や石の斧、石の臼、貝製の腕輪や矢じり、骨でつくった道具などが出土しています。中には、はるばる九州から運びこまれた市来式土器も出土し、沖縄と九州の交流があったことが確かめられました。



浦添貝塚

一九七二年（昭和四十七年）には、九州との交流を知る上で貴重な遺跡であるとして、県の史跡に指定されました。

## 仲西貝塚

仲西一带には石灰岩台地が広がっていますが、この台地の西側の斜面、ちょうど小湾川に面したあたりに仲西貝塚があります。

一九六九年（昭和四十四）に、浦添高校郷土史研究クラブが発掘したところ、貝塚時代前期終わり頃の土器（室川式やカヤウチパンタ式）や石の斧、貝塚人が食料にした獣や魚の骨、貝殻などが出土しています。



仲西貝塚の遺物包含層



市来式土器

米軍・牧港補給地区内（キャンピングゾーン）の海岸近くの砂丘地につくられた、貝塚時代後期の集落跡です。一九八七年～八八年（昭和六十二～六十三）に、発掘調査が行われました。

この遺跡には住居址や作業場らしき跡、埋葬墓などがあり、土器・石器、貝製品、食料にしたイノシシ、ウミガメ、魚の骨や貝殻などが多量に出土しています。土器の中には弥生土器もあります。彼らは九州の弥生人と交易しており、交換用のイモガイやゴホウラなどの美しい貝を貯め置いた跡もいくつか見つかっています。

## かじょう 嘉門貝塚



嘉門貝塚の発掘風景(上)と貯めおかれたイモガイとゴホウラ(下)

## 浦添市内の遺跡編年表

九州		沖縄		市内の遺跡	年代
縄文時代	早期	貝塚	I	城間古墓群から土器だけ発見	今から 7000年前 6000年前
			II	未発見	5000年前
	中期	時	III	浦添貝塚下層 当山洞穴遺跡	4000年前
			IV	浦添貝塚中層 港川越地原遺跡 第二下港川遺跡下層 港川遺跡群	3000年前
	晩期	代前	V	仲西貝塚 浦添貝塚上層	
弥生時代	前期	貝塚時代後期	I		2000年前
	中期		II	嘉門貝塚 牧港貝塚下層	
	後期		III	横竹貝塚 牧港貝塚上層	
古墳	墳安	IV	第二下港川遺跡上層 チヂフチャー洞穴遺跡	1000年前	
鎌倉町	倉	グスク時代	前期	拜山遺跡・真久原遺跡 牧港第二貝塚	500年前
			後期	伊祖城跡・親富祖遺跡 浦添城跡・親富祖第二遺跡	

## チヂフチャー洞穴遺跡

この洞穴は、安川団地内の公園にある自然の鍾乳洞です。一九八七年の発掘調査で、洞穴入口一帯から土器、石器、貝製品などが出土しています。その中に一点だけですが、貝塚時代最古の（約六六〇年前）爪形文土器もありました。かつて洞穴一帯は風葬墓に使われ、去る沖縄戦では住民の避難壕になりました。

洞穴は全長一五〇メートル、幅二～四メートル、高さ一・五～四・五メートルあり、鍾乳洞独特のつらら石、石匂、石柱などがあります。



チヂフチャー洞穴遺跡の入口



伊祖城跡の石垣

## 古琉球の浦添

古琉球とは、伊波普猷の著書『古琉球』に由来します。一二、一三世紀から薩摩の侵入（二六〇九年）までを沖縄の歴史学では「古琉球」とよんでいます。本土の中世にあたる時代です。ここでは、古琉球の頃の浦添を文献に書かれた伝説からたどってみましょう。

首里王府が編集した『中山世鑑』、『中山世譜』、『球陽』などの正史によると、沖縄の最初の王統は「天孫氏」だと書かれています。天孫氏は二五代続いたといわれますが、一人の王名も伝わっていません。天孫氏は、神祕のベールに包まれた神話の時代というのが真相でしょう。

一一八七年、逆臣の利勇が天孫氏二五代目の王を殺し政権を奪い、国内は乱れます。そこで浦添按司尊敦が利勇を討って、王位につき、舜天王統を開きました。では、古琉球の史跡にご案内しましょう。

## 牧港ティランガマ （為朝を待った洞穴か）

沖縄の歴史の中で王の名前がはっきりするのは、舜天王（在位一一八七〜一二三七年）からです。その舜天は、源為朝の子という伝えがあります。話はこうです。

保元の乱に敗れて流罪になった為朝が伊豆の大島から抜け出て運天港に着いた後、大里按司の妹を嫁にして、後の舜天が生まれました。やがて、為朝は妻子と共に国に帰るため牧港から船出しますが、嵐のために失敗します。女性を船に乗せた

ので海の神の怒りに触れたというのです。仕方なく、為朝は一人で帰国します。牧港の地名は、その妻子が為朝を待ち続けたことから「待港」となり、「牧港」になったとことです。牧港ティランガマ（テラブのガマ）は、為朝の妻子が待っていたところといわれています。為朝伝説は、沖縄各地に伝わっています。



牧港ティランガマ（テラブのガマ）

## 伊祖城跡 （英祖の誕生）

舜天王統は、舜天、舜馬順熙、義本と続きますが、義本の代に飢饉や疫病が大いに流行したので、王は自分に徳がないことを悟り、英祖に位を譲ったとことです。この英祖が誕生したところが伊祖城です。



浦添ようどれ石厨子(英祖王)

英祖の誕生については、次の伝説があります。  
 英祖の父、恵祖世主は天孫氏の流れをくむ人物で、伊祖城に住む伊祖の按司です。彼には子供がなかったのですが、晩年のある日、日輪が飛んできて妻のふところに入る夢を見て、生まれた男子が英祖だといわれています。それで英祖王の神号は英祖日子(エソノテダコ)となっています。  
 英祖王(在位一二六〇〜一二九九年)の頃には、久米島・慶良間・伊平屋・奄美地方からみづぎものを持って来るようになったといわれ、浦添城の西(現在の北?)に沖縄で最初の寺・極楽寺を造り、仏教の普及につとめました。  
 英祖王統は、英祖の後、大成、英慈、玉城、西

威の王が続いたと伝えられています。  
 伊祖城は、本格的な発掘調査が行われていないため、詳しいことは不明ですが、城壁や石段をみる事ができます。また、城のいたるところから古琉球の頃につかわれたと思われるいろいろな遺物が採集されています。

## 英祖の眠る浦添ようどれ

浦添ようどれに向かって右側の墓に英祖は眠っているといわれています。この墓の中には、大型の石厨子一基と中型の石厨子二基があります。石厨子には、仏像、蓮、鶴、亀などが巧みな技術で彫刻されています。

なお、この英祖の墓室の石厨子と、尚寧王の墓室の大型石厨子一基はともに県の有形文化財に指定されています。



英祖の高御墓

## 伊祖の高御墓

国道三三〇号の伊祖トンネルの上にある墓で、墓の前にきれいな石積みが見られます。中には、英祖の父(恵祖世主)とほか二人の按司の遺骨が納められているといわれています。

崖の洞穴を利用したこの墓は、墓口が広くなくっており、歴史的に古い形式に属するものといわれています。

## 実在の王 察度 (察度の居城か浦添城)

英祖王統が滅ぶと人々は浦添按司の察度を推して察度王統(一三五〇〜一四〇六年)が始まりました。察度になって、初めて、その実在を書物で確認することができます。

中国の『明史』という書物に一三七二年に明の太祖の招きに応じて、中山王察度の弟泰期が初めて明に進貢したことが記されています。察度は約三〇年の間に三二回も中国の明に使者を送っています。

察度にまつわる伝説に、浦添間切謝名村の農家、奥間大観の男性と天女の間にも生まれたとする伝説や港に入港した大和商船から鉄を買取って農具をつくり、農民に与えて信望を集めたなどの説があります。

この頃、いろいろな制度や技術・文化の各面で中国の強い影響を受けたと考えられます。

王は察度から武寧に変わりますが、一四〇六年に佐敷按司巴志に滅ぼされ察度王統はおわります。

# よみがえる王宮・浦添城

又 浦添の根国  
 百十 積も 黄金  
 浦添ど 有りよる  
 渡嘉敷の真国



浦添城の遠景

## うらそいの時代

三五〇年ほど前に書かれた『中山世鑑』には、琉球王国の王宮は大昔から首里城だったと記されています。沖縄学の父といわれている伊波普猷や、名高い歴史家・東恩納寛惇は、こうした古い歴史観を打ち破って、浦添の古名「うらそい」が浦々を襲う（支配する）という意味であり、察度王統までの王宮は浦添城だったことを明らかにしたのです。

この浦添城の発掘調査が一九八二年（昭和五十七）からはじまり、首里城以前の王宮の遺構・遺物が地下から掘り出され、華やかな王城の一端をかいま見せました。こうした発掘成果から、浦添城は平成元年に国の史跡に指定され、今後も発掘調査を続けて整備復元していくことになりました。

## 城を築く

浦添城は、仲間から牧港にのびる石灰岩丘陵の東の端に築かれています。城はそのなかでも最も高く、中頭一円が見渡せる場所です。

浦添城の築城工事が本格的に進められたのは十四世紀頃で、察度王の時代にあたります。自然の丘陵の上に、鉄斧で面取りした切石で城壁をめぐらし、石灰岩を砕いたコーラルを大量に運び入れて造成する大工事でした。城門があつたと伝えられる場所では、斜面に城壁が築かれています。難工事だつたと思われます。この城壁の下には、二〇歳くらいの未婚とみられる女性が手足を無理に折曲げた形で葬られていました。城壁工事の支柱にされたのでしょうか。



城壁の下に埋葬された若い女性

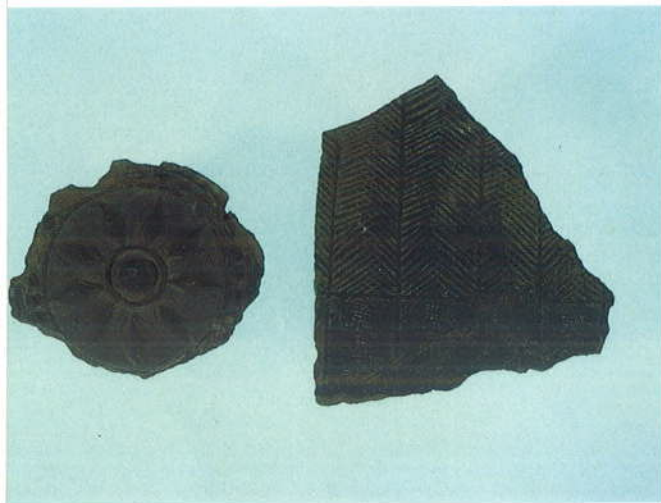


ため井戸

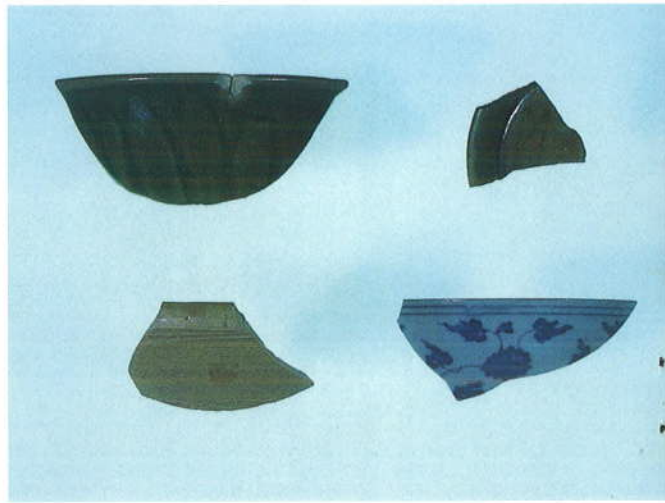


石列





朝鮮瓦工がつくった高麗瓦



中国から輸入された陶磁器の破片

## 察度王時代の浦添城

察度王時代の浦添城内の特別な建物には、灰色の瓦が葺かれていました。この瓦には「癸酉年高麗瓦匠造」という文字がスタンプされています。癸酉の年に高麗（朝鮮）の瓦職人が造ったという意味です。察度王が造ったという伝説の高楼（高い建物）も、このような高麗瓦が葺かれたみごとな建物だったのでしょう。

察度王は、一三七二年に中国の明国にはじめて朝貢して、その王権が皇帝から承認されました。

察度王の偉業によって、琉球が海外貿易で富み栄える道が開かれました。この浦添城から出土する大量の中国製陶磁器や東南アジア陶器は、浦添城の繁栄ぶりを物語っています。当時の牧港は国際貿易港でした。この港にはアジアの商船が出入りし、そして珍しい舶来の品々が荷あげされたことでしょう。

## 薩摩藩の浦添城焼き討ちと尚寧王

察度王の子武寧王は、佐敷から挙兵した尚巴志に滅ぼされ、王宮も首里城に移されました。主を失った浦添城は荒廃し、一五二四年に尚真王の長男・尚維衡が王の怒りを買って浦添城に隠居させられた時には、「城郭毀壊し、宮殿荒無して、瓦廃れて垣頽れ、鞠りて曠野と為る」という状態でした。尚維衡は宮殿を修築してここに住み、第二尚氏七代の尚寧王も王位につくまでこの城に住んでいました。

しかし一六〇九年に薩摩藩が琉球に侵攻したとき、浦添城は焼き討ちされ、戦に敗れた尚寧王は

鹿兒島に連行されました。ようやく帰国を許された尚寧王は、一六一七年に浦添城を改修して隠居します。そして一六二〇年に英祖王の墓「ようどれ」を改修すると、その翌月に亡くなりこの墓にほうむられました。

発掘調査では、展望台のある広場一带から、尚維衡から尚寧王までの宮殿跡とみられる石組遺構やため井戸などが発掘されています。どのような建物があったかよくわかりませんが、兜の破片や金メッキした鍔の金具、刀の飾り金具などが出土しています。美しい鍔・兜に身を固めた尚維衡や尚寧の姿が目に見えそうです。



南側の城壁



浦添ようどれ

の歴史書『中山世鑑』などの本が次々と出された。また、文学・芸能などの文化も発展した時代です。

## 浦添ようどれと碑文

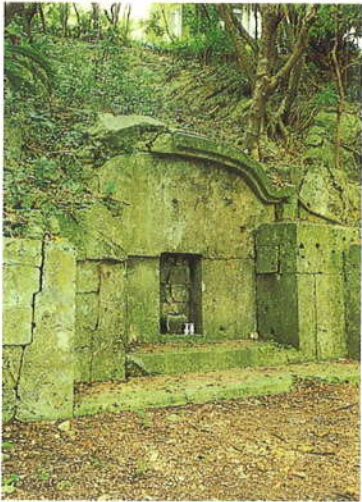
浦添城の北、崖の中腹に二つの墓が並んでいます。横穴式で、前面に石垣を積み、その上に漆喰をぬって仕上げられています。向かって右が英祖王、左が尚寧王の墓です。

二つの墓の間に、「ようどれのひのもん」が建っています。碑文の表はかながきの和文、裏は漢文です。浦添から国王を迎えられた尚寧のこと、盆正月には浦添間切の人たちがこの墓をそうじするように、ということなどが書かれています。

## 浦添御殿墓

ウドウンバカ

沢岬の「うらそえ荘」の南崖下にあります。亀甲墓とよばれる沖縄独特の墓で、浦添市では最大級のもので、正面の屋根のまゆも大きな石材二枚で造られ、全体の石積みもていねいでみごとなものがあります。



浦添御殿墓

御殿とは王子や按司の家柄、またはその屋敷などをさします。この墓には浦添王子の子浦添朝英（二七八一〜一八〇八）とその子朝薫（生没年不詳）をまつてあります。二人とも首里王府の重役を勤める一方、歌人でもありました。

また、浦添家は浦添家本『伊勢物語』を出し、文学にも深い関心をもっていたようです。

## 玉城朝薫の墓

たまぐすくちょうくん

前田の国際センターの隣に玉城朝薫（一六八四〜一七三四）の墓があります。

玉城朝薫は王府の役人として薩摩や江戸へ上った際、能や狂言、歌舞伎などの大和芸能を学び、それを琉球の芸能にとり入れ、琉球国劇ともいわれる「組踊」を創り出した人物です。代表作には「二童敵討」、「執心鐘入」、「銘苅子」などがあり、現在でも絶えることなく、上演されています。

墓の内部には天井を支える石柱があること、墓庭の石垣が曲線を描いていることなど石造建築をみる上でも貴重な文化財です。



玉城朝薫の墓

薩摩の侵入は、琉球が日本の幕藩国家体制に組みこまれるという大事件でした。形の上では王国でありながら、薩摩藩に管理されるという新たな歴史が始まりました。この時代を「近世琉球」とよんでいます。

ところで、薩摩の支配下にあつても中国との朝貢関係は続きました。中国からの使者（冊封使）が来るとその間、那覇にいた薩摩の役人はすべて浦添の城間村に移されました。薩摩との関係を隠そうというわけです。

近世琉球は、古歌謡集『おもろさうし』や王家



経塚の碑

## 浦添街道沿いの史跡・文化財を訪ねて

王府時代、首里王府から出される文書などは、早馬で各間切（いまの市町村にあたる）の番所をつないでおくられました。そのために整備された道路が宿道といわれる公道でした。

首里から、中北部の間切へぬける宿道がいくつか浦添を通っています。なかでも、浦添城やようどれが王家とのかかわりが深かったこともあって、首里〜経塚〜仲間〜牧港を経て中北部へぬける西宿道はとても重要でした。このルートはのちに浦添街道とよばれました。

ほかに、浦添番所（仲間）から当山を通って宜野湾に至る道、そして安謝から勢理客、城間を通じて中北部へいく道などもありますが、ここでは浦添街道を中心にして、そのまわりの史跡や文化財をたずねてみることにしましょう。

## 宿道の整備

現在の県道一五三号線は、かつての浦添街道にほぼ沿っています。宿道として整備されたのは一六世紀末。「浦添城の前の碑文」にそのことが出ています。

この碑文は一五九七年、ときの尚寧王が首里・平良と浦添城までの道を改修し、その完成を記念して浦添城の表門に建てたとされています。残念ながら、いまは拓本しか残っていませんが、碑文には首里の入口である平良橋を石橋にしたこと、道路面を石畳にしたことなどが書かれています。

さて宿道は平良橋から大名を通り、大名の坂（南又ヒラ）を下ると、浦添の沢岬です。沢岬から



安波茶橋

こんどは経塚へ坂（北ヌヒラ）を登ります。住宅街を通り、しばらく県道とかさなりませんが、第二経塚のバス停を過ぎたところで経塚公園に向けて左に折れます。古道に入るとすぐ右手に、市指定文化財の経塚の碑があります。むかし、この付近に妖怪が出没して人々を困らせた。そこで日秀という仏教僧が金剛經を書き写して土中にうめ、さらにその上に「金剛嶺」と書いた碑を建てた。すると以後、妖怪は出なくなつた、ということです。



赤皿ガー

浦添間切の番所（いまの役所にあたる）は仲間村にありました。資料によると瓦ぶぎの木造家屋でまわりを石垣で囲み、老松がおおい茂っていたようです。いまはそのおもかげは残っていませんが、

## 間切番所

ばんじよ

経塚と安波茶の谷間を流れる小湾川上流に、アーチの石橋がかかっています。安波茶橋といえます。この橋が、いつできたのか、それははっきりしませんが、平良橋と同じく、浦添城までの道が改修された年ではないかとおもわれます。橋の近くには、赤皿ガーという井戸があります。国王が赤い皿で水をのんだことから、その名がついたようです。橋の東側には、茶山の地名が残っています（茶山団地になっている）。戦前まで、そこは王家の茶園になっていました。

## 安波茶橋

あはちゃ

浦添中学校の入口左側あたりがかつての番所跡です。番所の後方（現在、浦添中学校グラウンド内）には、舜天から尚巴志までの歴代の王の位牌が安置された龍福寺がありました。正史によると、英祖王の時代に禅鑑という僧侶が琉球に漂着し、浦添城の西に極楽寺を建てた。その後、寺は浦添城の南に移されたが、火災で消失したりした。さらにその後、尚円王が再建し、名を龍福寺に改めたといわれます。その龍福寺が浦添にあったのは大正時代の初め頃までで、寺はよそへ移転してしまいました。龍福寺の前の道は、浦添城へと続きます。城についてはここでは省きますが、城跡の一角にひっそりと建つ伊波普猷霊園はぜひ訪れてみたいところです。



伊波普猷霊園

## 伊祖から牧港へ

浦添番所跡から安波茶交差点を伊祖向けに県道を二〇〇メートルほどいくと、御待毛跡です。こ

こは、国王が普天間宮参拝のとき、仲間村の人々が国王を出迎えた場所です。右に折れる道は、宜野湾間切への道でした。

御待毛からの宿道は、県道右側の丘陵づたいに、伊祖へと続きます。伊祖トンネルの手前右には、

一里毛ーまたは一里バンタと呼ばれる地名が残っています。首里からちょうど一里（四キロ）の道のり、しかもけわしい崖になっていることからその名がついたのでしよう。

一里毛の北側には県指定文化財の伊祖の高御墓と、同じく県指定の浦添貝塚があります。伊祖の高御墓は英祖王統ゆかりの墓で、英祖の父・恵祖世主がまつられているといわれます。

伊祖から牧港への宿道は、伊祖交差点で県道を右に折れ、県道と並行するように牧港小学校入口まで続きます。宿道の西側には伊祖城跡（県指定、北側には羽衣伝説のある立津ガーがあります。

牧港小学校入口のあたりから宿道は県道と重なりながら、かつての牧港橋へと続き、宜野湾の字地泊へとぬけることとなります。牧港は天然の良港といわれ、古くは海外との貿易港にもなったようです。為朝伝説にも名高い牧港ティランガマ（テラフのガマ）が、牧港橋の西南にあります。

## 当山の石畳道

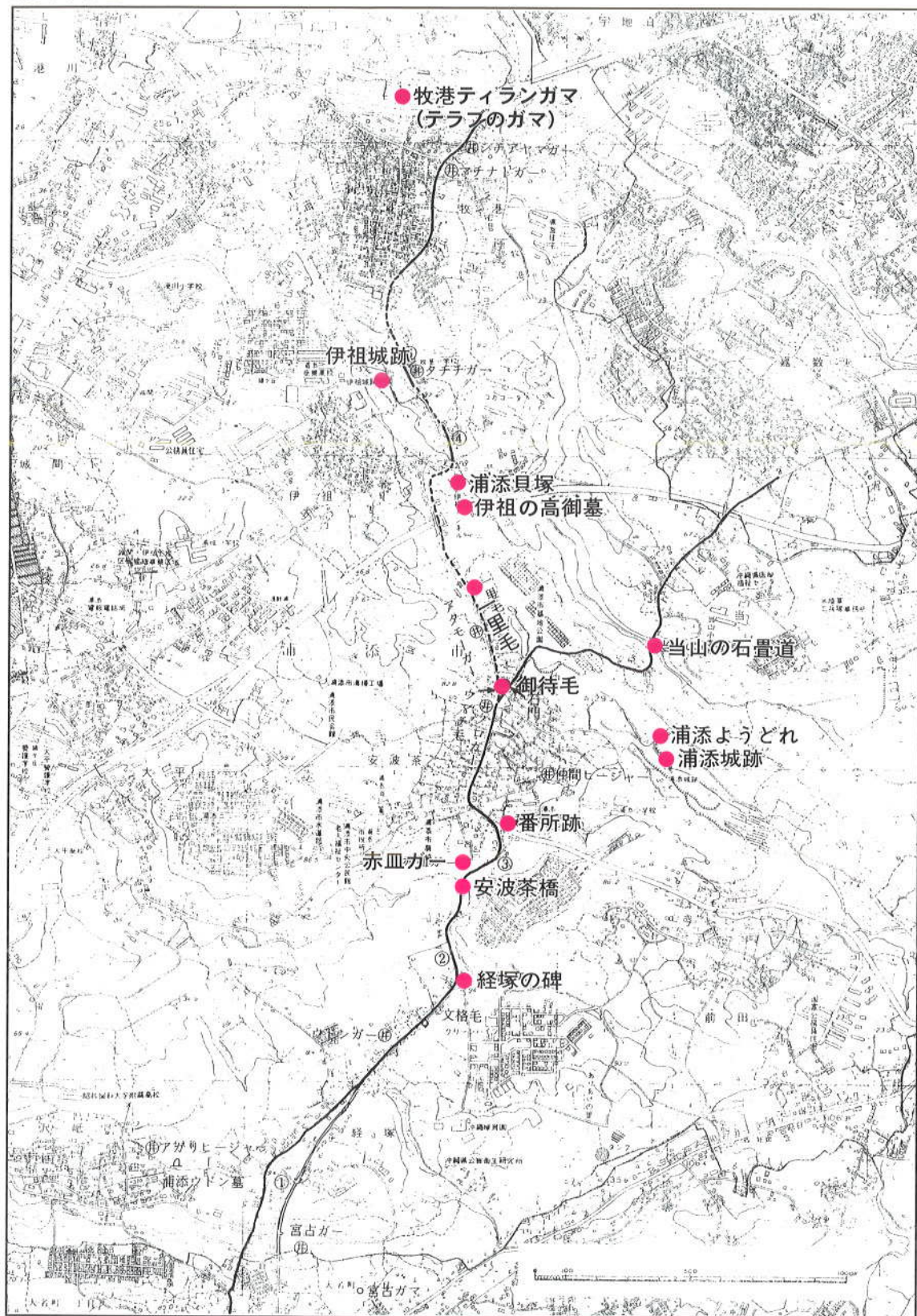
浦添番所を起点に御待毛を右に折れ、当山から宜野湾にぬける道は普天間街道といわれました。古くから人々の生活道であったが、一六七一年に宜野湾間切が新設されると宿道として整備が行われたようです。

市指定文化財の当山の石畳道は、牧港川の中流（当山ではメーガール）をはさんでS字形の谷間につくられた全長二〇〇メートル、幅約三メートルの部分です。石畳が敷きつめられた年代ははっきりしませんが、宜野湾間切の新設から考えて一七世紀か一八世紀初め頃とおもわれます。



当山の石畳道

# 浦添街道



# 民俗探訪



クバサーヌ御嶽

## シマの守り神

沖縄の古い村落（シマ）には必ず、御嶽（ウツキ）またはムイ（森）とよばれる拝所があります。御嶽にまつられているのはシマの遠い祖先で、村人たちを守ってくれる神と信じられています。村人たちは御嶽の神々にシマの繁栄と安全を祈願し、感謝をささげます。

シマにはまた、古くから村人たちが使用してきた井泉があり、子供が生まれたときに使う水を汲



西原拝山



仲間地頭火又神

んだり（ウブガーという、正月の若水を汲んだりした井泉などを拝んでいます。そのほか地域によってテイラ、ビジュール、権現、火の神などいろいろな拝所があり、シマの年中行事以外にも、家族や親族（門中を含め）の祈願で訪れる人が多いのです。

都市化がすすんで多くの拝所は形を変えたり、破壊されたりしていますが、昔ながらの雰囲気を保っている拝所が市内にはまだ残っています。そこにはだいたいの香炉が置かれています。いつもの見なれた風景の中に、こうした古い拝所との出会いがあるかもしれません。

## 御嶽

古い資料によると、浦添城内には三つの御嶽と殿、五つの井泉がありますが、いまその場所がはっきりしているのは渡嘉敷嶽（ティグガマ）だけです。浦和の塔の下の洞穴がそうです。

浦添の中の浦添といわれた仲間には、クバサーヌ御嶽、長堂之嶽（仲間ンテイラ）、地頭火又神などがあります。中央公民館裏手の森はトモリの嶽です。そのほか沢岬のカニマンヌ御嶽、西原拝山（古柵原之嶽）もぜひ訪れてみたい拝所です。

## 井泉（カー）

西原の拝山下方にある西原東カーは、市指定文化財になっています。湧水を樋で引く井泉のことを樋川（フイジャー）といいます。安波茶樋川、沢岬樋川、仲間樋川などは今も静かに水をたえています。

首里王府が編さんした『琉球国由来記』や『琉球旧記』には、浦添の御嶽・森が二五カ所、井泉が二四カ所記載されています。



安波茶樋川



勢理客の獅子舞

## まつりと民俗芸能

戦前までの浦添の村落（シマ）は、農業中心の社会でした。農業は自然（天候）に左右されます。台風や干ばつ、あるいは害虫の発生などがあると作物の収穫が少なくなりします。そこで人々は、作物が豊かに実るように、自分たちのシマや家々が繁栄するように神に祈り、感謝をささげました。これらの祈りは一年を通して、さまざまな形で行われます。それを年中行事といいます。この行事は拝所をまわって祈りと供え物だけで終わるものもあれば、祈りのあとで神々に各種の芸能を奉納するというものもあります。

綱引きや獅子舞などの民俗芸能を私たちは娯楽的な面だけでみてしまいがちですが、もともとは豊作を祝い感謝するために行われてきたものです。たとえば、旧暦六月二十五日（年中行事はすべて旧暦）の綱引きは、カシチーまたは新米とよばれる収穫したばかりの米を神にささげ、さらに吉凶を占う「まつり」の一つでした。



内間の獅子舞





前田の棒術と綱引き

さて、ここで浦添のまつりと民俗芸能をみてみましょう。  
戦後の社会の変化とともに、まつりの形もだいぶ変わってきました。拝所での祈願は続いています。民俗芸能は後継者がいなくてとだえたものもあります。  
綱引きは城間・沢岬・内間・小湾にもあったようですが、いまは前田と西原にしか残っています。綱もシマでは作れなくて、西原の場合はよそ

市内の綱引きと獅子舞の日程

獅子舞			綱引き		字
仲西	内間	勢理客	西原	前田	
旧八月十五日 夜	旧八月十五日 夜	旧八月十五日 夜	八月の指定土・日 ウマイ!	旧六月二十五日	日程
公民館	公民館広場	公民館	公民館前の 道	公民館前の 道	場所
八七六一二〇八三	八七七―三二五一	八七八―八五三八	八七六一〇四八四	八七九―八三一六	連絡先
	棒術も行われる	十五夜の演目いろいろ	初日は盆踊り	棒術も行われる	メモ



西原の綱引き

で引いた綱を買い入れて使っているようです。  
旧暦八月十五日は、「村遊び」「八月遊び」「ジュー

グヤー」などとよばれ、いろいろな芸能が各地で賑やかに行われます。祈願のあとの演目は獅子舞や棒術、長者の大王の劇など実に多種多様です。以前は、芝居や組踊もあったようです。  
勢理客・仲西・内間の獅子舞は特に有名です。そのうち、勢理客の獅子舞は一九七三年（昭和四十八）に国選択、八一年（昭和五十六）に市の無形文化財に指定されました。  
そのほか小湾のアギバリー、経塚の金鼓隊があります。この二つは明治以後に生まれた新しい民俗芸能といえるでしょう。  
これらは、市でだこまつりで演じられることでもあります。じかに各地のまつりの場所へ出かけていって一緒に楽しむのもいいものです。綱引きと獅子舞の日程表をつくってみました。

???開いてみよう

見てみよう

調べてみようー浦添の歴史と文化

——次の浦添市の歴史・文化情報サービス機関で係員に相談してみよう。  
場所は表紙の地図にあります。——



浦添市美術館(有料、第2土曜は中学生以下無料)

### 琉球の漆器を展示

開館時間：火曜～日曜の午前9:30～午後5:00(入館は4:30まで)  
毎週金曜は午後7時まで開館

休館日：月曜・公休日の翌日・6月24日・年末年始

バス：美術館前・大平バス停から歩いて5分

住所：〒901-2103 浦添市仲間1-9-2(市民会館近く)

電話：(098)879-3219(みにいく)

沖縄学研究室(浦添市立図書館内：無料)

### 琉球の歴史・文化の史料・図書が充実

利用時間：火曜～金曜の午前10:00～午後7:00

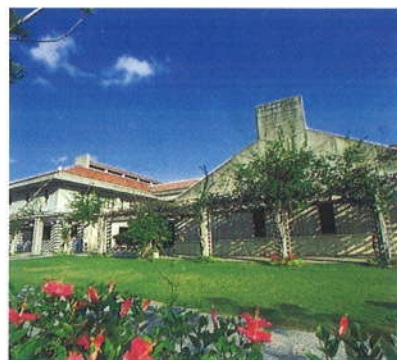
土曜・日曜の午前10:00～午後5:00

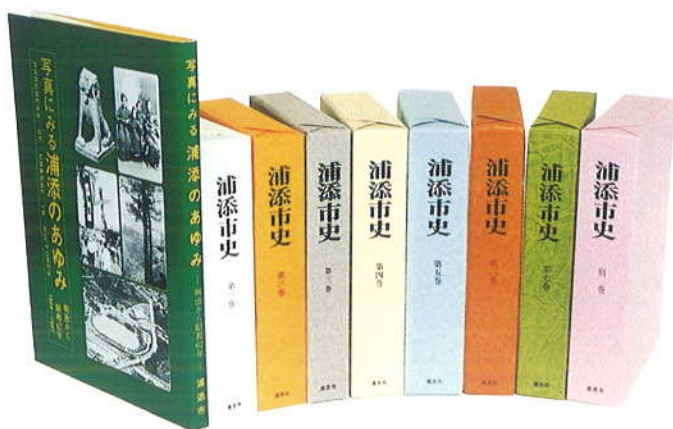
休日：月曜・15日・公休日・6月23日・年末年始

バス：市役所前・美術館前・大平の各バス停から歩いて5分

場所：〒901-2114 浦添市安波茶2-2-1

電話：(098)876-4946(よくよむ)





## 浦添市史・全8巻

巻	編 別	主 な 内 容	発 行 年 定 価
第一巻	通史編 浦添のあゆみ	①浦添のあゆみ ②浦添歴史文化辞典 ③統計で見る浦添の移り変わり ④浦添歴史年表	平成元年3月 2,100円
第二巻	資料編1 浦添の文献資料	①前近代・近代の文献資料 ②浦添関係おもろ ③新聞記事 ④古地図・拓本・写真	昭和56年3月 1,500円
第三巻	資料編2 民話・芸能・美術・工芸	①民話・伝説 ②芸能 ③美術・工芸 ④名所・旧跡	昭和57年3月 2,000円
第四巻	資料編3 浦添の民俗	①社会生活 ②衣食住 ③生業 ④人生儀礼 ⑤年中行事 ⑥民具ほか	昭和58年3月 1,600円
第五巻	資料編4 戦争体験記録	①戦争体験 ②戦災地図・戦災実態調査票 ③疎開 ④県外生活 ⑤浦添の人物	昭和59年3月 全巻セット 販売のみ
第六巻	資料編5 自然・考古・産業・歌謡	①自然 ②考古 ③言語・歌謡 ④交通 ⑤歴史一般	昭和61年3月 2,100円
第七巻	資料編6 浦添の戦後	①戦争体験記録 ②復興・基地・都市化 ③行政資料 ④教育・スポーツ	昭和62年3月 1,800円
別巻	統計・文献目録・総索引	①統計にみる近代浦添 ②浦添関係文献資料目録 ③総索引	平成2年3月 2,100円
	写真にみる浦添のあゆみ		昭和63年3月 700円

全巻セット価格 10,000円

問い合わせ——文化課、図書館まで



牧港 ティラジカマ  
(テラフのガマ)

● 牧港橋碑

シマヌカ

伊祖城跡

● 伊祖の高御墓

● チヂフチャー 洞穴遺跡

● 浦添貝塚

メーダカ

URASOE-SHI  
浦 添 市

● 当山の石畳道

● 西原の綱引き

● 西原東ガ

● 西原拝山遺跡

● 浦添市美術館

● 安波茶樋川

● 市立図書館

● クバサーヌ

● 御嶽

● 番所跡

● 安波茶橋

● 経塚の碑

浦添城跡

● 浦添ようどれ

● 浦添城跡

● 玉城朝薫の墓



御嶽

祝 豊年

祝 豊年

浦添市西原二区

